誠と実学の再発見

小川晴久

はじめに

一九八〇年代に入ってからの二十年間は、私の世界観を大きく変えた二十年であった。このまゝの生活様式を北（先進工業国）が続けたら地球の生態系が破壊されてしまうことに、私も遅まきながら気づき始めた。グローバルな南北問題の勉強を一・二年生を対象とする全学ゼミナールで開始して早々、人類が十九世紀までに消費した食糧よりも、二十世紀一世紀が消費した食糧の方が多いと知って（アメリカのあるシンクタンクの計算）、衝撃を受けたが、二十世紀は大量生産、大量消費の世紀で地球資源の浪費、地球環境の汚染という点でまことに罪深い世紀であることの認識は、日を追う毎に確信となっていった。とくに人類は地球を使い捨てて他の惑星に移り住むことはできず、そのいみで宇宙時代は幻想であることに気づいて以来、私は完全に生態系を守る保守主義者に変った。科学技術の発展、先端技術の開発にも私は極めて冷やかな目を向けるようになった。ＧＮＰ（国民総生産）の数値を減らして、もっと我々の身体を動かし活用することが、

これから意識的に目指されねばならぬという結論に私は到達していた。南の価値がとても大事なものであることがハッキリわかってきたのだ。植物が、とくに樹木がこれからの人間の教師であるという結論にも達した。

この過程と平行して三浦梅園の「誠といふの説」との出会いは、特別な意味をもっていた。十八世紀の日本が生んだ自然哲学者三浦梅園は、私が最も尊敬する学者であったから、右の一文との出会いは時間の問題であったが、今振り返ってみると二重の出会いがあったことがわかる。

最初の出会いは「誠」の概念の自然科学的な解釈として。二度目はそれをひっくり返すかのような有機体的（植物的）論理の発見として。

梅園の同一の文に二度の出会いがあったことに、先に述べたこの間の私の世界観の大きな転換が反映されていた。そのことから本論を始めよう。

一、誠の概念の自然科学的解釈

問題の「誠」とは、『中庸』に出る「誠者天之道也。誠之者人之道也」の「誠」のことである。私は青年時代を中心に長い間、誠は主観的概念であり、したがって「誠者天之道也」という規定は主観性にみちた人間中心の自然法則観であると解してきた。戦前日本の右翼が好んだ概念であったことも、その解釈を根拠づけた。しかし、私の尊敬する自然哲学者三浦梅園に前記「誠といふの説」という一文があり、この一文を介して「誠者天之道也」という規定を真面目に、文字通り受け取めるようになったのである。

梅園はこの一文で誠と信のちがいを最初に明らかにする。どちらも「まこと」と訓ずることができるが、「信」は「うそをいわぬ」意で、「誠」は「偽（いつわり）なき」こと、両者を比較してみると誠は信よりはるかに大きな概念であることを明らかに

する。誠とは偽りがないこと。これこそ自然界（天）の道にふさわしい。梅園は自然から二つの例を引く。

「一勺の水を海に入て、海の水増たりといはんは愚なり。まさずといふは妄なり。水をくはふる所は我にして、増すと増さざるとは我にあらざる物は、強ひて其辨をもとめずして可也。我に在る処の誠をつくす、是れ君子の道なり。」

「誠といふの説」の右の冒頭部は、「誠者天之道也。誠之者人之道也」の後半の命題の解釈のようであるが、しかし、よく〳〵考えれば一勺の水を海に注ぎいれたのが事実であれば、海の水量が増減したか否かの論議に拘りなくその事実が肝心なことであって、誠者天之道也の解釈とみるべきである。その主旨は『玄語』の同じ次の例をみるとハッキリする。

「今涓滴を海に棄つ。海水増すと曰う。人信ぜずと雖も、而も誠の道なり。海水増さずと曰う。人これを信ずと雖も、欺の事なり。」（原文漢文。小冊、人物、天人）

これは「成者天道、以人観之則誠」という本文の梅園自身の説明（注）になっていて、「誠者天之道也」の解釈であることがよくわかる。ここではハッキリと一滴の水を海に落としただけで海水は確実に増したのであって、それを誠の道であると言っている。僅かな量の増加でも厳然として増加は増加だとするのが、「偽りがない」という意味での誠の道であるという。物理学的計量世界の説明であり、私はこれを「誠者天之道也」の自然科学的説明であると解した。ここには主観的要素はどこにもない。

もう一つの自然界の例証として梅園があげるのは、植物の種を誠とする例である。

「罌粟の子煙草の実は至って小さきものなり。地に落さば目にもかからぬ様なれども、内に一つの誠といふ物あって、奪ふべからず、隠すべからず、昧ますべからず、覆ふべからず。その時いたるに及んでは、芽を出し葉を生じ、花を開き実を結ぶ。その子を水に腐らし、火にやきて芽を出さずといふは、その子の尤ならんや。是によりて物の子を実といふは、実は則ち誠なり。」

植物の種が芽を出し葉を生じ、花を開き実を結ぶ、その必然性が誠と説明されている。種＝子＝実そのものが誠と等置されるほど、植物の例は誠者天之道也の説明としてはぴったりである。

以上の「一勺の水」（涓滴）を海水に注ぐ例と植物の種の例は、誠者天之道也の自然科学的な説明であり、私はそれによって始めて「誠者天之道也」に開眼したのであった。この二つの例のうち、誠者天之道也の自然科学的な説明としては前者（一勺の水）の方がすぐれていると思った。前者の方がインパクトがあった。僅かな差でも厳然たる差、そこに誠（偽りのなさ）が存在するという前者の例が強烈に私の脳裏に焼ついた。十数年前のことである。

それから十年ほどたってこの命題との再度の出会いがあった。誠者天之道也の誠とは有機体（植物）の論理であるという発見である。

二、有機体（植物）の論理としての誠

「誠者天之道也、誠之者人之道也」の出る同じ『中庸』の中に「誠者自成也。而道自道也。誠者物之終始。不誠無物。」という命題がある。私にはとくに「誠者物之終始」という規定が長い間わからなかった。しかしそれも、シューマッハーの次の一文を読んで氷解する時が来た。

「奇妙なことであるが、技術というものは、人間が作ったものなのに、独自の法則と原理で発展していく。そして、この法則と原理が人間を含む生物界の原理、法則と非常に違うのである。一般的にいえば、自然界は成長・発展をいつどこで止めるかを心得ているといえる。成長は神秘に満ちているが、それ以上に神秘的なのは、成長がおのずと止まることである。自然界のすべてのものには、大きさ、早さ、力に限界がある。だから、人間もその一部である自然界には、均衡、調節、浄化の力が働いているのである。技術にはこれがない。」（『スモール・イズ・ビューティフル』講談社学術文

庫730）

技術や機械と対比するとき自然界（生物界）の特徴は成長が自然に止まる所にあるという右の指摘そのものが、まず私に深い感銘を与えたのであるが、やがてこの指摘は「誠者物之終始」という規定が生物の法則・原理であることを私に気づかせてくれた。物には終始がある。終始がある物といえば、生物である。始めがあれば終りがある。これは生物の鉄則であり法則である。物の終始が誠であるとされれば、その誠とは生物の法則を意味することになる。

誠が生物の法則であることがハッキリすれば、誠者自成也も生物の自然な生長（成長）過程を意味することがわかる。人間をはじめとする動物の成長過程（その法則）が誠であるのであるが、梅園が先にあげた植物の例がやはりわかりやすい。種（たね）（子、実）→芽→葉→花→実のプロセスである。

本稿の冒頭で述べたように、地球の生態系を守るために私は近年南の価値に開眼し、考察を続けてきた。北と南は機械と手作業、工業と農業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働等、いろいろな対比ができるが、動物と植物もその一つである。南としての植物に注目し、二十一世紀の人間の師は樹木であると結論づけるところまできていた私であったので、生物の法則を意味する誠は、私にとっては何よりも植物の法則、論理を意味した。これは梅園が誠の自然科学的解釈であげた二例のうち、後者の例に当る。

誠が植物の法則であり論理であるという、二度目の誠の概念との出会いは、とても重要な意味をもつものであった。誠者天之道也の本質はこの側面にあると考えるからである。では物理学的計量世界の厳密性を意味した誠と植物の論理を意味する誠とはどのような関係をもつのか。両者は同一であるのか、それともちがうのか。『中庸』にたちかえって、『中庸』の誠の規定そのものを整理してみよう。

三、『中庸』の誠の概念の二重性

『中庸』には先にあげた「誠者自成也、…誠者物之終始」という規定のあとに、「至誠無息」（間断性のなき誠）が悠久なる時間と天地という空間、そこを埋める山川まで作りあげたというスケール大きな記述がある。

「故に至誠は息む無し。息まざれば則ち久し。久しければ則ち徵らかなり。徵らかなれば則ち悠遠なり。悠遠なれば則ち博厚なり。博厚なれば則ち高明なり。博厚は物を載す所以なり。高明は物を覆う所以なり。悠久は物を成す所以なり。博厚は地に配し、高明は天に配す。悠久は無疆。此くの如き者は、見えざれども章らかなり、動かざれども変じ、為す無くして成る。天地の道は、一言にして盡すべきなり。その物為るや貳せざれば則ちその物を生ずるや測れず。」

不断の息むことのない営みが、悠久の時間を作り出す。その悠久さの中で、天地山川がそれぞれ微小な単位要素〔わずかな明るさ（昭昭）、わずかな土（一撮土）、わずかな石（一巻石）、わずかな水（一勺）〕の堆積、いわば積分として形成されたことが述べられる。以下のように。

「今かの天はこれ昭昭の多。その無窮に及ぶや、日月星辰これに繫り、万物これに覆わる。」

「今かの地は一撮土の多。その広厚に及ぶや、華嶽を載せて重しとせず、河海を振めて洩らさず、万物これに載る。」

「今かの山は一巻石の多。その広大に及ぶや、草木これに生え、禽獣これに居り、宝蔵興る。」

「今かの水は一勺の多。その不測に及ぶや、黿鼉蛟龍魚鼈ここに生じ、貨財ここに殖ゆ。」

微積分のような世界であり、説明である。先の誠者物之終始が生物の論理であるとすれは、時空山川の成立と再生産の世界は無機物の機械論のような世界である。しかし無機物とか機械とみてはいけないのであろう。「無窮に及ぶや」とか、「広厚に及ぶや」とか、「広大に及ぶや」とか、「不測に及ぶや」とかは、いわば∞（無限大）にする意であり、それによっ

て生きた時間や天と地、山川となる、言いかえれば万物を無限に生みだし、生息させる時間や天地や山川となると解すべきなのであろう。すべては生きているのであろう。死すべき生物も、天地山川も、時間も。それらすべてを貫いているのが「無息」という間断のなさであり、それが誠と命名されたのである。

ただ誠者天之道也の誠を生物の論理とみるのはまちがっていないとしても、たぶんに十八世紀的解釈であって、古代にあっては人間の呼吸をモデルにしたような気の陰陽運動が内実であったかもしれない。「息むなし」という間断のなさは人間の呼吸がよく似合う。あるいは時の刻みでもよい。脈搏でもよい。三浦梅園は誠の内実を一即一一の会易の条理運動とみた可能性がある。備忘のために記しておく。

誠の概念は有機体（生物）の論理と最小単位の蓄積という機械性の論理という一見相い反する二つの性格をもつように見えるが、その内実を気、ないし気の論理と見れば、両者は一つのものの二側面として統一していることがわかる。気はギリシャ古代の原子（アトム）とちがって連続性（有機体性）をもつ。原子は不連続であって、機械論にふさわしい。しかし同時に気は物質の最小単位であって擬似アトム的性格ももつ。疑似機械性といってよい。先程のわずかな土や石の積み重ねから大地や山ができ上るという論理がそれである。誠の論理の一見すると二重性にみえる性格は気において統一されていた。

四、実の内実―間断のなさ（無息）

至誠無息について考えてみよう。誠は息むことがない。この間断のなさは機械のそれではない。生物の生命の営みとしてのそれである。原理として呼吸、脈拍を考えていい。気を擬人化して気の呼吸と考えてもいい。

人間も生物としてみれば不断に誠を実践している。誠を営んでいなければ、死ぬしかない。肉体の営みとしては誠実そ

のものである。生物として生きているとはそういうことである。

しかし人間は意識をもつ存在である。それによって人間の行為には濃淡が生まれる。精勤と怠惰の差が生まれる。ムラができる。ところがこのようなムラは植物にはない。幽谷深山の花は、人が見る見ないに拘らず、その時がくれば美しく開花し、香気を放つ。梅園が植物に誠実の模範を見るのはここに基づく。ここから陰日向なく己れの職務に勤めることが実ある態度ということになる。

実がある、中身があるということはどういうことか。植物がひたすら刻々と生長するように自己の勤めを果たすことである。職人たちが毎日毎日同じ営みを重ねていて、いつテレビカメラをもって踏み込まれようと、いつカメラに収められようと恥しくないウラオモテのない営み――これが実があるということだ。

等身大の認識、等身大の営みと言い換えてもよい。機械に頼ってスピードアップしたり、対象を縮小したりしない。一度に沢山のことを処理しようとはしない。ハンナ・アレントのいう地球疎外に陥らず、それをたえず克服しようとする態度である。

梅園は言う。「君子は実ありて名を有せず」と（「君子。有実而不有名」玄語、小冊、人部、設施）。梅園はこのような実ある人物を君子と名づけ、実ある営みをする者を君子と定義したのである。実学とは自然の誠なる営みに倣う実ある学問を言うのである。

おわりに

以上から我々は「誠者天之道也、誠之者人之道也。」という『中庸』の誠は生物（とりわけ植物）の論理であり、それを実践している者と学が君子であり、実学であると結論づけることができる。梅園にとって君子とは植物をモデルとし、模

範とする人間であったと言ってよい。そして二十一世紀を迎える我々も植物を、樹木を我々の師として今や発見しつつある。

ハンナ・アレントは望遠鏡の発明と数学によって人類は地球を対象化し、相対視（縮小）することができるようになって、地球疎外が始まったと指摘する。地球の等身大的認識の克服である。巨大な地球を地球儀に縮小したり、脳裏に描いたりできるようになったことは、それ自体偉大な行為である。近代科学や技術がもたらした地球疎外という偉大さは、中世までの人間を支配していた彼岸的超越性を人間から喪失させた。これは彼岸的超越性に跪拝していた人々の生の莫大なエネルギーの解放を意味した。ブルクハルトが『イタリア・ルネッサンスの文化』で指摘した同様の視点に基づき、アレントも人間精神の現世化は「それまで堰（せ）き止められてきた人々の生の莫大なエネルギーを地上のさまざまな生活領域に放射することになった」と言う〔（千葉真『アーレントと現代』（岩波書店）33頁〕。と同時に、それによって生物学的生命の維持だけが人間にとっての最高善となったという（同、49頁）。

たしかにアレントの指摘のように彼岸へのまなざしを失くした現代人は、ます〳〵肉体的生（肉欲）に関心を集中し、人間はます〳〵むき出し（裸）になりつつある。セックスにしか関心を示さなくなっている。生物学的生命の維持だけが最高善となるというアレントの指摘が肉欲への跪拝を意味する限り、その批判は正しい。しかし現代は人間の生命そのものが、健康そのものが脅かされる時代である。生物学的生命の維持だけを最高善とすることによって、地球の生態系の大切さに開眼し、植物に開眼し、それを媒介にして自分が生物であることを再発見すれば、再び前近代の価値を再発見することも可能となっている側面をみおとしてはならない。アレントが奴隷労働として位置づけた家事労働の価値が新たな視点から再発見されるように〔拙著『南の発見と自立』（花伝社）50頁〕。

本稿で東アジア近代以前の天の道としての誠とそれに導かれた近代以前の実学を再発見するに至ったのも、その実例で

ある。

シモーヌ・ヴェーユは注意力の喚起を強調している〔『重力と恩寵』（ちくま学芸文庫）192頁〕。彼岸的超越性に集中していた注意力が人間精神の現世化（世俗化）と共にあらゆる方面に拡散している現代にあって、我々は再び植物（樹木）を師として、それを媒介にして天（自然）の道としての誠に注意を凝らさねばならない段階を迎えたようだ。ここにきて気づくことは「誠者天之道也、誠之者人之道也」にどれほど巨大なエネルギーがかつて込められていたことかという発見である。その認識を少しでも回復することが、機械文明や地球疎外に抗して少しでも人間性を回復することを意味するのである。

〔了〕